全国個性化教育研究連盟

全個教連会報

第５４号

発行
平成１２年４月１日
発行責任者
染田屋謙相

移行期間を充実したものとするために・・・

全国個性化教育研究連盟研修部長
神奈川県平塚市立港小学校教頭　河合剛英

いよいよ新教育課程への移行措置期間が始まることとなった。

今までそれぞれの学校がさまざまな工夫をしたり、時間をやりくりしたりしながら実践してきた総合学習が、その時間を保障されるとともに、大手を振って実践することができるようになったのである。このことの意義は計り知れないほど大きいと考えられる。

現在全個連の会員は、団体会員や海外会員を含めると７００名ほどである。団体会員の学校は当然のこととして、学校ぐるみで個性化教育を推進している場合には、総合学習に関する条件整備や環境も整い、それなりの実践に取り組むことができていると考えられるが、そうではない学校に勤務している会員にとっては、ここに至るまでの苦労は多かったことと思う。

最近になってようやくどこの学校も総合学習を意識しはじめ、何らかの手を打たなくてはいけないと動き出したところであろう。今が「またとない好機」である。是非それぞれの学校において、会員自らが中心 となって総合学習実践の火の手をあげてほしいと願うところである。

但しその場合でも、個人的なレベルでの実践ではなく、学校全体として、あるいは少なくとも学年としての協業体制で取り組むべきではないかと思う。

私の周辺地域の学校を見ても、総合学習の試行を行なっているケースが多いが、そのほとんどは学級レベルでの実践である。

題材を見ると、国語の「石うすの歌」を コアにし、社会科や家庭科とも関連づけて戦時における人々の生活を体験したり、悲惨な戦争について話し合ったりするという６年生の教科横断的な総合学習や、給食時にストローのビニル袋を飛ばす遊びを元に「吹き矢で遊ぼう」という学習活動を構成し、吹き矢の歴史や利用方法等を調べたり実際に塩ビ管を利用して吹き矢を作り、力と加速の関係を理解するとともに力学の基礎概念を養うという４年生興味・関心型の総合学習も実践されているのである。

ただ惜しいのは学級単位の実践であり、横への拡がりが見られないということである。他のクラスと協力してすれば更に多様で深まりのある活動ができたのではないか、また人的・物的な学習環境等も含めその学年の総合学習として蓄積できるのではないかと、よい実践であればあるほどにそう思う次第である。

是非とも学年の先生方に呼びかけ、題材によっては地域にも協力を求めて、学年Ｔ ・Ｔで取り組んで頂きたいと願っている。

学習指導要領の改定により総合学習が位置づけられたことは、私たちのように個性化教育に取り組む教師にとっては願ってもないことではあるが、逆に総合学習がクローズアップされるに伴って、学力低下を危惧する論文も目立つようになってきた。これは一般受けするような論調ともなっており、油断をしていると結構自分の周りに賛同者がいたりすることもあるので、充分に注意を払う必要がある。

指導内容を３割も厳選したから学力が低下するのか、それとも子どもの興味・関心に応じるような総合学習では、国民として必要な資質や能力を身につけることができないとでも言うのであろうか。

一体何をもって「学力」とするのか、また「基礎・基本とは何か」等についてそれぞれの学校で充分に吟味してほしいと思うのと同時に、一部の論者の言に惑わされることのないよう、確固たる理論と信念、そして子どもたちの学ぶ力を信じて、これからの教育に携わってほしいと願うところである。

個性化研究発表会報告

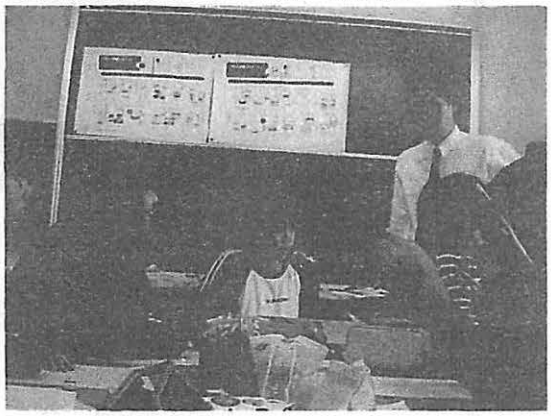
今年度も、全国各地のオープンスクールで個性化教育研究発表会が実施されました。その中から会員が実践したり、事務局員が参加したりした研究会を報告します。少しでも会場の熱気が会員のみなさまに伝われば幸いです。

大磯町立国府小学校　１０月５日（火）

管内のＴＴ担当の先生方を集めて協力指導研修会が開催されました。その中で、３年総合「お年寄りと共に生きる」と６年総合「自分を見つめて」の授業が公開されました。

６年の総合は、教師が子どもと共にテーマから作り上げていく学習として、子ども達は、自分の１２年間を振り返り、自分を見つめ直し、テーマを決定し８時間の個別学習に入るところでした。音楽、ダンス、調べ学習、作文、工作、絵、工作、料理などの課題に取り組もうとする子ども達の意欲や熱気が感じられました。

その中で、料理をしたいと集まった子ども達は、自分の周りの人に感謝する、喜んでもらうということで、食べてもらうためのレシピを作っていました。楽しそうに目を輝かせて調べ学習に取り組んでいました。（神奈川・舘岡）



ー料理のレシピ作りー

草加市高砂小学校　１１月１８日（木）

平成９、１０年より「総合的な学習の時間」の研究を積極的に行ってきた。今やその実践には、国立の静岡大学教育学部付属浜松小学校と並び全国から熱い視線がよせられている。

去る平成１１年１１月１８日に開催された高砂小の「総合的な学習の時間」研究協議会の公開授業で注目されたのは３年生の「漬け物名人に挑戦だ」の授業である。６班にわかれ、各班に地域の漬け物名人の保護者がいて、子どもがいくつかの質問をぶつけながら、いかにしてうまく漬け物をつくるか、創意工夫している様がよくわかる授業であった。

「学びをくらしに結びつける」ことが総合的な学習であるといわれるが、この授業はまさにその典型といえよう。さらに、地域の保護者＝漬け物名人が児童の間に入って、児童の活動を支援している。子どものくらしが地域のくらしに開かれているといえよう。子どもはこの活動で何を学んだのか。一つには、つくる喜び、つくった後の食べる喜びであろう。さらに、漬け物の難しさと奥の深さもある。つまり、より本物を目指しての食文化の追求といえる。

他に、５年生の「富士山に登ろう」という実践、６年生の「ふれあいの森」などがあった。

（埼玉・中村良廣）

ー漬け物名人に挑戦ー

久世町立遷喬小学校　１１月２６日（金）

「ぼくたちは、おばあさんのためにお掃除をしにいこうと思います。」 意気揚々と計画書を片手に先生の前で説明をする子ども達。暖かいまなざしで大きくうなずいて聞いていた小瀬先生、「君らはええと思っても、おばあさん自分でやるからええいわれたらどうする。かえって迷惑になるんとちがう。」小瀬節が冴えます。こんなはずじゃなかったと困った顔で作戦会議を開き再度挑戦しに行く４年生。「ぼくたちのやりたい計画をいうんだけれども、相手のおばあさんは何をしてほしいかを聞くことにします。」ドキドキ顔の子ども達・・・「がんばってね」小瀬先生から大きな花まるをもらって本当にうれしそう。思わずまわりを囲んでいたたくさんの参観者の中からも安堵の声とともに、自然に激励の声が子どもらにかかっていた。緊

張と和やかさの巧みなバランス。ただやらせるばかりでない。一つ一つの課題がていねいに時間をかけられ、子ども達と先生の思いが熟成していくような「総合的な学習」の理想的な姿を目の当たりにしてきた遷喬小学校の公開研究会だった。１５分ほど歩いた山で、落ち葉と紅葉の中で思いっきり遊ぶ１年生ののびやかさ。

４月からの米作りを経て、自分たちで育てて食べる、食べてもらうポンポン菓子作りに夢中になっていた２年生。同じく育てた大豆をどう生かし、物作りに目をむけさせていったらいいか苦心した３年生。物作り、職業体験など自分でたてた計画での体験をふりかえながらいかに人に伝えたらよいか苦心していた５・６年生。

長道校長先生の職員を見守る暖かい目と、普段の研修会での練り上げがあるからこそ、課題別に分かれた分科会でどの学年に質問がきても先生方は一人で本音で答えられていたのだろう。

「元気のいい先生がたに会いたければ、遷喬にいらっしゃい」（赤松康隆先生）と言う言葉に触発され２年前に国内派遣として１週間お世話になった自分にとって、６００名以上の参観者を前に堂々としている先生方は眩しいばかりであった。岡山の真ん中、元気に発信し続ける学舎がそこにあった。（千葉・加藤）

ー先生から大きな花まるー

東浦町立緒川小学校　１月２１日（金）

緒川小学校の第15回実践研究会に行って来ました。

テーマは、「子ども達が生きる力を育む学校を目指して」です。緒川小学校は研究開発学校ですから、「21世紀を見据えた教科・総合を柱とする個性化カリキュラムの編成」というサブテーマも付いていました。

緒川小のポリシーは、このテーマの中に既に表現されています。「子ども達に…育む」ではなく、「子ども達が…（自ら）育む」わけです。たった１字ですが、えらい違いです。

私が最初に緒川小を訪れたのは13年前でした。今回緒川小に来て、あちこち歩き回ってみて、最初の訪問の時と同じように感じたのは、「生活臭がある」ということです。別の表現を探すと、「日常性にリアリティーがある」、或いは「学校全体が子ども達の（ための）ものになっている」といった感じでしょうか。この印象は、ぎょうせい㈱から出版されている『おがわっ子の活動』の文中では、「子ども達を能動的な学習の主体者として捉える」「学校全体が学びの場、学校にいる時間すべてが学びの時間である」といった表現で説明されています。

このような表現はここ数年来多く用いられるようになり、今でこそさりげなく受け止めることができるわけですが、実は13年前に、成田先生から、緒川小の教育の理念として、この言葉を初めて教えてもらったときは、実に新鮮なものに感じられたことを思い出します。このことからも、緒川小の先見性、実践の確かさ、そして育まれた伝統といったものが感じられました。

当日は、文部省から高浦先生、そして加藤先生、成田先生、奈須先生といった先生方の他にも、それこそ緒川小の黎明期から関わってきた懐かしい方々が大勢いらしていました。機会があったら、それらの先生方に今年の緒川小についてお話を伺いたいものです。

（神奈川・池田）

八王子市立みなみ野小学校　１月２７日（木）

「自分の課題を見つけ、楽しく取り組める子の育成」を研究主題とし、総合的な学習を通して研究発表を行った。多摩地区唯一のオープンスクールで今年で開校３年目であるが、開校１年目から加藤幸次先生を招いて研究発表をしている。全学年学級の公開授業であり、授業参観も兼ねていた。

２年生の「みなみ野そばだーいすき」は、町探検で知り合ったおそばやさんが「そばを育ててみませんか。」と言われ、そばを育て、そばを作ることにした。

当日は、２つの石臼の前で、そば粉のひき方の実演、そば茶、そばがらのまくら、八王子のそばという紹介コーナー、そばの歌を作詞、作曲し歌ったり、紙芝居で発表したり、表現活動が多様でした。どのコーナーにも地域の方が参加、協力していた。とくに「そばの会」の人が大活躍でした。

パネルディスカッションでは、加藤幸次先生がコーディネーターで、パネラーにはみなみ野中の先生、みなみ野小の先生、みなみ野小の保

護者でした。保護者からは、どの子も意欲的に取り組んでいる総合学習のすばらしさと共に、不安な点も指摘された。今後、指摘された点を補いながら、総合学習によって得られる点を生かす努力が必要であろう。みなみ野小の先生方は、みなさんが教育活動にとても精力的でした。

（東京・川島良代）

ー石臼でそば作りー

横浜市立大岡小学校　２月４日（金）

立春の日に開催された。18学級の公開授業、研究発表、研究交流、研究シンポジウムともりだくさんで充実した時間を過ごすことができた。

シンポジウムでは、奈須先生がわかりやすく経験単元について話された。

大岡小学校（ひられれた学校に充実にむけて）の取り組みについて

◎５つの枠組みによるカリキュラムの充実
　いきいき活動　なかよし活動　総合的な単元　はげみ学習　深め学習

◎子どもの主体的生活運営の推進
　年間計画委員会　各種実行委員会　児童代表委員会

◎家庭・地域連携の一層の推進
　教育ボランティア制度　活動の参観から参画へ

◎新しい評価法と相互評価票の開発
　８カテゴリーの資質・能力の検討
　「ともそだち」の作成

◎バリアフリーな教育環境のデザイン
　時間をひらく　空間をひらく　支援体制をひらく

このような研究内容で、子どもたち、保護者・地域の人たちと教職員でひらかれた学校を創りあげようとしていた。　（神奈川・馬瀬和子）

イギリス私立小学校の総合的学習の時間

私は昨年、イギリスの私立小学校で研修する機会を得た。その学校で総合学習に興味があると伝えた所、「PSE」というプログラムを紹介してもらった。5年前から始まったこの取り組みは、他校にも評判になり、毎年100名近くが授業見学に来るそうである。「PSE」とはPersonal Social Healthy Educationの省略した名称で、一言で言うならば「Life Subject」という意味である。このプログラムは付属の幼稚園生から始まり、小学校を卒業する（13歳）まで継続して続けられる。

その内容の柱は「健康」「人間関係」「環境」「市民としての生き方」「安全」の5項目である。これらは教科の範囲では収まらないが、重要なものとして、見直していこうというねらいである（きっかけは政府のEducation Reform Act 1988）。授業は時間割には組み込まれていない。定期的に行われていることだけは確かだが、見学した4つの授業もいつどこで行われるかは、担当の先生に直接伺わなくてはならなかった。それらの授業は主に「安全」についての内容だった。12歳のクラスでは、凧が電線に引っかかり、それをとろうとして所を飼い犬が身代わりになって死んでしまうというビデオを見て、安全について考える授業だった。

この様に、ビデオを見て考える授業のほかに私が見学した授業は、「市民としての生き方」のまとめとしてロールプレイを使った授業があった。法廷を想定して劇化したものだ。また、他の教科とのクロスカリキュラムを行っての授業を行ったり、警察署の人や目の不自由な方を呼んで話を聞いたりする授業なども多く行っているとのことであった。

（慶應義塾幼稚舎　大野俊一）

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉
〒115-0044 東京都北区赤羽南1-16-2-504
03-3903-4780　庶務部長　佐久間茂和
e-mail sakuma.s@ma4.justnet.ne.jp
http:/www4.justnet.ne.jp/~zenkoren/index.html

全国個性化教育研究連盟会報　第54号
平成１２年４月１日発行
編集責任者　事務局長　浅沼 茂
編集　広報部　舘岡茂樹